

# 「眼下の敵」前篇

1

いや、もう、じつに変わった若者なのだ。これまで長く生きてきたが、こんなに風変わりな若者にはこれまでお目にかかったことがない。名前からして変わっている。呪師しゅし靈れいた太郎ろうという。しかも職業が民間探偵だというのだからふるっている。

そもそも、このご時世に、いや、どんな時世であろうと、民間探偵などという職業が成り立つものか？——それはそれとして、いまもこの若者が探偵をしているのはまぎれもない事実であるらしい。

この冬は例年になく寒さが厳しい。その凍てつく寒さが海水を凍らせ、吐裸とらら羅島の四周をびっしり埋めつくした。そんなふうだから人が島にたどり着くには、沖合に船をとめ、その氷原を島端ま

で、徒歩、あるいはそり櫓で渡るしかない。しかもこの水面は絶えず動きつづけているのだ。

荒涼たる氷原に北からの冷たい風が吹きわたる。止むやことがない。氷塊は風に揺れる。たがいに氷角をガリガリ削りあい、ときに轟音ごうおんとともにパクリと割れる。そこにオホーツク海の冷たく真つ黒な水が牙きばをむいて流れ込んでくる。いたるところ氷原を縫うように交差する。水路が複雑に入りくんでいる。だから、さらに氷原は動くのだ。動かずにいられない。

島に向かう人間はそんな氷原のうえを渡らなければならぬのだ。じつに数時間を要する難行と云つていい。これにはまず一人の例外もなしに音をあげるはずだが——呪師霊太郎だけはふしぎにそれを苦にしていまいようだ。それどころか、ほとんど楽しんでるようにさえ見える。鼻歌交じりの気楽さで歩を運んでいるのだ。

が、現実のこととして、行く手は絶えず水流にさえぎられ、飛び越えられないときには、大回りして迂回うかいしなければならぬ。畝うねのように波打ち、

岩のように硬い氷原は、うかつに歩くと、つま先を畝にぶつけ、生爪なまづめが剝はがれるような痛さをもたらす……つまり難行の連続といつていい。

どんなに霊太郎が浮世離れした、ノンキな若者であろうと、防寒具一式に、脚絆きゃはん、草鞋わらしにかんじき、毛皮の耳当て防寒帽、背囊はいのうのうえに寝具まで巻いた重装備では、ただ歩くだけでも一苦労のはずだ。それが——さほど頑強なようにも見えないのに——じつに楽しげに畝から畝に飛び移っているのはどうしたことか。

それはたぶん霊太郎が一人でないからだろう。連れがいる。ヒヨイヒヨイと氷原の畝から畝に飛び移りながら、その連れにこう尋ねる。

「なあ、耕介こうすけ、これをどう思う。誰が何のためにこんなことをしたんだと思う？ この先には何があるんだろう」

しかし何を訊きかれても、当の耕介はただそれにニヤアと答えるばかり。なにしろ耕介はネコだからしてそれ以外に答えようがないのだ……それはやむをえないとして、その不機嫌さはどうにかな

らないものか。なにもかわいい声で鳴けというのではない。そこまでムリな要求はしない。けれども、せめてもうすこし愛想よくふるまうことを覚えてはどうか。愛玩動物あいがんどうぶつの身でありながら、明らかに靈太郎の声をうるさがっていた。

靈太郎はいつもネコを連れ歩いているらしい。大きなオスの黒ネコだ。それをふところに突っ込んでいる。ネコはいつも寝ている。寝てないときがない。いくらネコだって寝過ぎだろう、ときに靈太郎はそれを不満に思うようだ。なにしろ見るからに横着よこぢそうなネコなのだ。

根室を出港して島々をめぐる根室近海線に乗った。色丹しこたんで、漁業組合が運営する、いわゆる自由航路に便乗させてもらい、吐裸羅島の沖合の氷床に下りた。

根室を出港した船上、樺太カラフトに渡るといふ女連れの女衞せげんと乗りあわせた。その女衞男に、そのネコはどうして耕介という名前なのか、と訊かれた。靈太郎はこう答えた。銀座を歩いているときに、とあるビルの表示に、なな、ががし、耕介探偵事務所、

という名称を見たのだ。いつかは自分も銀座に事務所を持つような探偵になりたい、あやかりたいと願ひ、それで拾ったネコに耕介の名前をつけた……

女衞はその話に興味を持ったようではなかった。へらへら笑い、女はいらないか、安くしとくぜ、といった。いらぬ、と霊太郎は答え、懐の耕介が面倒げにニヤアと鳴いた。霊太郎に女はいらない、ただひたすら探偵をしたい。それだけだ。

こうして、はるばるオホーツク海の孤島まで渡ってきたのも、その探偵をしたいという一念からのことだった。

いま、

「なあ、何とかいえよ。これでもおまえのことを頼りにしてるんだからさあ。これは何のまじないなんだろう、これはぼくをどこに導くんだろう」

霊太郎が指さす先には――

水面に黒いものが散っている。いや、散っていない。それらは数メートルの間隔をおいて点々と落ちてい<sup>き</sup>るのだ。そこかしこ、氷の亀裂に流れ込<sup>れ</sup>

んできた水流が、まるで毛細血管のように複雑に錯綜さくそうしている。それら水流を縫うように、その黒点の連なりがくねくねと氷原をどこまでもつづいているのだ。果ては氷原の彼方かなたへと消えていた。

——これは何だ？

霊太郎はそれを拾い、しげしげと観察した。そして、どうやらアザラシの表皮を剥はいだもののようにだ、と結論づけた。

この島にはアザラシの繁殖地がある。かつてこの地を漁場にしたアイヌはアザラシの皮を剥むいて皮紐かわひもにしたという。それをトララ・ラクといい、地名の由来にもなっている……霊太郎は島に来るまえ、そうしたことを下調べしておいた。

だから最初、それらはそのトララの材料だろうか、と考えた。誰かが櫓こしでも運ぶ途中にそれらを落としたのだろう、と。

が、そんなはずはないのだ。そうだとしたら、そんなふうにはぼ十メートルの等間隔に落ちているはずはないだろう。それは明らかに何者かが、何らか目印として、意図的に置いたものにちがいない。

なかった。

——誰が、何のために？

靈太郎は首をひねった。

——ぼくをどこかに誘うために？

一瞬、そんな疑念が脳裏をかすめたが、いや、そんなはずはない、と思いなおした。

これだけの数のアザラシの皮を、道しるべに落とすには、どれほどの労苦を要するものか。とうてい人間わざではない。自分は、そんな膨大な手間と時間をかけて、どこかにおびき寄せなければならぬほどの大物ではない。それに、靈太郎がこの日、この時刻、吐裸羅島の氷面に下りるのを、誰かがあらかじめ知るのとは不可能なことだ。靈太郎自身にしてからが事前にはわからなかったことなのだから……

ここで注釈をさし挟ませてもらうと——呪師靈太郎はあまりに自己評価が低すぎるように思う。多少なりとも正當に自分を評価してさえいれば、もうすこし早く、ことの真相に到達しえたはずなのだが。自己評価の低さが彼の推理を誤らせた。

——この道しるべは誰のためなのか、何のため  
のものなのか？

それがわからない。わからないながらも、その  
目印のあとをたどらずにはいられなかった。吐裸  
羅島に渡ろうとしたそもそもその目的をすっかり忘  
れて——

それもやむをえないだろう。なにしろ霊太郎は  
生まれながらの野次馬で、好奇心のかたまりなの  
だから。また、そうでなければ探偵などという仕  
事はやっていられない。

この吐裸羅島の西にトカリウシという地がある。  
アイヌ語で「アザラシの多いところ」という意味  
だ。事実、その砂浜がアザラシの一大産褥さんじょくち地とな  
っているのだ。いまはその季節ではないが、初夏  
から晩秋にかけて、そこに何百頭ものアザラシが  
群れ集い、旺盛おっせいな性欲のままに繁殖にいそしむ。  
繁殖には勝者と敗者がいる。勝者のオスは百頭も  
のメスをはべらせるが、哀れな敗者は一頭のおこ  
ぼれにもあずからない……

霊太郎は島の南の沖合で船から下りた。北に歩



いた。ところが目印は西のほうにまわり込んでいた。——吐裸羅島は絶海の孤島である。渡りの漁民が小さな仮集落を設けているだけで、常駐者はいない。なにしろ長さ六百間ほど（一キロあまり）、幅にして五十間（百メートル弱）ほどしかない小島なのだ。西側から上陸してもさほどの遠回りになるわけではない。

そうして歩いているうちに、いつのまにか氷原から島に上陸していたし、目印もいつしかとだえていた。そして——

「耕介、こんなところに来たよ」

「ニヤア……」

思いがけず、といおうか。海にのぞんだ岩場に隠されるようにして、小さな小屋があったのだ。

海からの水路が後ろにある——目印に導かれなければ、容易に見つけることはできなかつたろう。

何の変哲もない木造小屋ではあるが、樽たるを菰こもでおお掩おうように、四周の壁にしめ縄がピンと張りめぐらされている。それが扉口をふさいでいるのだ。しめ縄と玉串たまぐしにはしたでがつけられている……これ

ではしめ縄を切らずに小屋の出入りはできないのではないか。見るからに聖場の印象が強かった。

小屋の横に庇掛さしかけになった木組みの食料庫がある。覗のぞいてみたら、白菜が数束、それに一メートルほどもありそうな大きな鱈タラがカチンカチンに凍って放ほうり込まれていた。

高い屋根から煙がたちのぼっている。なかに人がいるのだろうか。でも、こんなところに、誰が？ 霊太郎としてはそれを確かめたかったが、戸にもしめ縄が張られている。それを無視して、小屋に押し入るのはためらわれた。だけど、どうしても見たい。どうすればいいか……戸の上部、庇ひさしの下に、小さな空気取りの小窓があった。あそこからなかを覗き込むことができるのではないだろうか。

「あの屋根に登ることができるか」

「ニヤアア」

襟にしがみつき、抗議するように爪をたてる耕介を、むりやり、ふところから外に押し出した。

明らかにムツとして、不機嫌そうな顔になりなが

ら、しかし耕介はあきらめたように小屋に向かった。さすがに敏捷な身のこなしで、丸太の壁をスルスルよじ登り、屋根に達した。ミヤアア、と押しつけがましい鳴き声をあげた。尻尾を鞭むちのように振りつづけているのは、機嫌の悪さをさらに誇示させているのか。

「なるほど、そうやって登るのか。わかったよ」

霊太郎のほうはきわめて機嫌がいい。小屋のほうに歩きかけ——ふとその視線を宙の一点に固定した。その表情に不審の色がさした。何か気がかりなことでもあるのだろうか。きよるきよる周囲に視線を走らせた。こちら、眼下の水路に視線を向けた。が、結局、なにも見つからなかったらしい。首をひねりながら、あらためて小屋に向かった。背中の荷物を雪のうえに置いた。慎重にしめ縄をくぐった。

ネコが登ったそのままに——といっても耕介のように機敏にはいかなかったが——壁をはい上がり、屋根の端から突き出している棟木に達した。そこから苦心さんたん惨憺のすえ、どうにか屋根に登った。

雪が降り積もっていて滑りやすい。四つん這いになりながら、慎重に屋根のうえを移動した。そして両手を棟木に当て——厚地の手袋越しにも凍りつく寒さが伝わってくる——体を乗り出し、頭を下にして、空気取りの窓から小屋のなかを覗き込んだ。窓の内側にも棧のように横木があった……すぐにはなかの様子を見てとることはできなかつた。柱に吊されたランプだけが唯一の明かりなのだ。薄暗い。それでも視線を凝らしているうちに、しだいに目が暗さになじんでいった。木組みの粗末な作りだが、余計なものは何も置かれておらず、床などもきれいに拭き込まれ、よく整頓されていた。

囲炉裏に火が熾っている。その火あかりのなか、奥にきちんと積みあげられた漁具——それも道具としてより、むしろ神具として使われているようだ——や巻いた縄、それに一人の少女の姿が浮かびあがったのだ。それが、赤い袴の巫女姿なのだ。耕介も霊太郎の体に両前足の爪をかけて逆さで肩越しになかを覗き込んだ。

「ニヤア……」おどろいたように小声で鳴いた。  
「そうだよな」霊太郎も声をひそめて囁いた。  
「ぼくもこれまであんなにきれいな娘さんは見た  
ことがないよ」

その声が少女の耳に届いたはずはないのだ。それなのに少女はサッとこちらに目を向けたものだから——もちろん、とっさに頭を空気取りの窓から引つ込めたから、見られることはなかったはずなのだ——さすがに霊太郎は肝を冷やした。小屋のなかを盗み見ているというひげ目がある。相手はとびきりの美少女なのだ。

一瞬、霊太郎の目に、囲炉裏の火を宿した少女の瞳が、この世のものとは思われないほど美しく焼きつけられ、むしろ、そちらのほうにより鮮烈におどろかさればしたのだった——

「おまえ様か？」と少女は妙なことを口走った。  
「そこサいるのはおまえ様なのか」

誰のことだろう？ 霊太郎のことであるはずはない。彼としては、そのおまえ様というのが誰のことなのか、それをぜひと確かめたいところだ

つたろうが——遺憾いかんながら、それどころではなかつた。ふいに誰かに両足を引っ張られ、屋根のうえに体を引きあげられたのだから。それもすごい力で。

「わっ」

屋根には雪が降り積もっている。体勢をたてなおす余裕もなかつた。引っぱりあげられた勢いで慣性がついて、腹ばいのまま、屋根の傾斜を滑り落ちてしまう。下が深い雪溜まりゆきだまりになっていたから、どうにか怪我けがをせずに済んだが、そうでなければ無事には済まなかつたろう。それでも二間あまりの高さから墜落し、したたかに腹を打ち、その痛みのために、すぐには立ちあがることはできなかつた。

「痛いたて……」

が、ゆっくり痛みいたみに声をあげる余裕さえ与えられなかつた。すぐに襟首をつかまれ、強引に立たされたからだ。若い靈太郎より、さらに若い、見るからに精悍せいこんそうな若者がそこにいた。憤怒の表情をあらわにして——それでいながら、その目が

爽やかに澄んでいた。漁師のよそおいの下から、赤銅色の、たくましい筋肉が覗いている。その二の腕に力こぶが盛りあがった。ぐいぐいと霊太郎の首を絞めあげながら、

「われはどさの誰だ。何でカグヤのごとば盗み見でた？」

そう訊いてきた。その訛りの強い口調から、単語を拾うようにして、かろうじてその意味するところを聞き取ることができたのだが——カグヤ、というのはあの少女の名なのだろうか。

「待ってくれ……」

が、そうはいかなかった。待ってくれなかったし、許してくれなかった。若者が、ではない。情況が、だ。

そのとき、何人もの男たちがふいに雪のなかから現れたのだった。漁師たち。いずれも屈強な体格に恵まれた男たちだ。それが怒り狂って、「オサム、このガキ、まだこりねーのか」、「もう逃がさにゃーぞ」、「性懲りのねー野郎だ」などと口々にののしりながら、一斉に襲いかかってきたのだ。

雪が舞いあがる。

「何ばしやがる、放せ」

いくら若者が体格に恵まれ、腕力に優れていようと、何人もの男たちにこう同時に搦つかみかかってこられたのでは、たまったものではない。あつというまに押しひしがれた。

が、このオサムとかいう若者は、それでも負けてはいない。雪に押さえつけられながらもなおも果敢に抵抗しようとしていた。

「ギャツ」

霊太郎がその巻き添えになったのは災難としかいいようがない。いっしょに押しつぶされてしまった。

耕介は——といえば、さつきとどこかに逃げてしまった。それも当然だ。なにしろ、この世にネコほど要領のいい生き物はいないのだから……あいつらぐらい頼りにならない生き物はいないのだから……



「あのう、ぼくはただ通りすがりの者で、こんなことされる覚えはないんですけど……」

霊太郎は一応、そう抗議したが——といっても、どうしてかニコニコ笑いながらのことなので、いま一つ、説得力に欠けたが——男たちはそれには耳をかそうとはしなかった。それどころか、なかの一人にこう怒鳴りつけられる始末だ。

「何で、こしたら孤島に通りすがりの者なんかあるもんか——おめえーもオサムの仲間かなんがサちげーね」

「いや、仲間もなにも——ぼくはこの人にはいまはじめて会ったんですよ」

「嘘うそこけ」

「嘘なんかこけてない。あ、いや、ついてないです。そもそも、この人が何をしたというんですか」

「こどもあろうに、このガキは、長オサのお嬢さんに

手ば出そうどしやがったんだ。捨て子だったごいづを、オサが情けぶかぐも拾ってやて、育ててやったどいうに、その恩も忘れおつてからに……それでもオサは情なさけはかけてやて、わしらのもとがら出ていって、二度ど戻らんなら、それでよしどするべ、とおいいんなさつたし。それ以上、咎とがめだてなさらんんだ。それを、このガキや、恩知らずにも、のこのこ舞い戻つてきやがつてからに

——  
靈太郎は、一瞬、男の訛りの強い言葉を、自分の頭のなかで自動変換するのが遅れ、ああ、うう、と口ごもつてしまう。

要するに、この吐裸羅島を基地とする漁師集団があつて、そのリーダーの娘に、この若者が恋をしたといふことのようにだ。そのことを咎められ、二度と顔を見せない、という誓いのもとに、集団を追放されたのだが、その約束を破つて、また島に戻つてきたといふことらしい。しかし……

オサム、という若者は、いささかも悪びれた様子を見せずに、昂こうぜん然と首をあげて、こう言い放つ

たのだ。

「オサの恩は片時も忘れたごどはねー。おまえ様  
がたが、おらを一人前の漁師サ、育ててくれたご  
ども、心底からありがてーと思つています。だど  
も、それどカグヤのごどどは話が別でねーですか。

おらはなんも、カグヤのことサ、一方的に、想おもい  
ば寄せてるわけだばねーど。おらとカグヤはまじ  
めに、本気で、将来ば誓いあつだ仲だ。いかに父  
親だからどいつて、生木を裂くように、おれらの  
仲を引き裂こうとするのは乱暴でねーですか。ま  
してや赤の他人のおまえ様がたが、何の権利ばあ  
つて、おれらの仲ば引き裂こうどするのか。あま  
りに理不尽だべ」

「何、生意気なごど抜かすだ。このガキが——」  
怒つて、殴りかかろうとするのを、靈太郎が割  
つて入り、まあまあ、と制する。それでやめてお  
けばいいものを、

「ところで、そのオサのお嬢さんは、カグヤ、と  
おっしゃるんですか。きれいなお名前ですね」

野次馬根性丸出して、そんなことをいうものだ

から、なおさら、その場の怒りをあおることになってしまふ。殴られなかったのが奇跡のようなものだ。

そのあげく、オサムという若者ともども、荒縄でぐるぐる巻きに縛られ、いやおうなしに引つ立てられることになった。

オサムは昂然と首をあげている。後ろ手に縛られてもひるむ様子を見せない。いっさい抗弁しない。その目は若々しく澄み切って、意志的な強い光をみなぎらせている。

——おらとカグヤはまじめに、本気で、将来ば誓いあつた仲だ……

霊太郎はその言葉を思い起こさずにいられたかった。あくまでも部外者であるが、このオサムという若者の一途な気持ちに好意を抱かずにはいらなかった。

二十分ほど歩かされたろうか。雪に埋もれた、道ともいえない道を後ろから追いたてられた。

北の突端に出た。

その先にひろがる浮氷は島のほか三方ほどには密ではない。そこかしこに海面が黒く覗いていた。浮氷は風に揺れ、絶えず、きしむような音をたてつづけている……

——これがメアントマリか。

話に聞いている。アイヌ語で「寒い港」というような意味らしい。

オホーツクは豊かな漁場に恵まれているが、冬、流水に閉ざされる吐裸羅島は良港がない。ただ、砂浜を奥に擁する、この入り江だけは、ふしぎに浮氷の数が少ない。慎重に氷を避けて船を進めればどうにか入り江から沖に出ることができ……海底に火山の噴出孔があるからだともいわれているが、事実かどうかはわからない。

ここにあるのは、季節によって、漁場から漁場へと移動する漁師たちの仮集落にすぎない。漁場の見張りやぐらを設け、粗末な木造小屋を何棟か寄せ集めただけのものだ。磯から突き出ている棧橋に漁船が何隻かもやわれている……

そこに狭い砂浜があった。それにテラス状の岩

場がつづいている。何十人もの男たちがそこに集まっていた。二カ所に石油缶が置かれ、盛大に火が燃えさかっていた。

二人が引つたてられながら、その岩場に入っていくと、男たちがどよめいた。敵意に満ちたどよめきだった。

「オサムでねーか」

「ずぶてーガキだべ。まだ、吐裸羅サいたんか」

「海サたたきこんでやりへ。んでもしなきや、このガキはこりねーべさ」

が、それにもオサムは見向きもしない。男たちのあいだを顔をあげながら毅然きぜんとして歩いている

——その堂々とした振るまいに霊太郎は感心せずにはいられなかった。この若者はただ者ではない。

すると、岩場のうえに、一人の男がヌツと姿を現したのだ。五十がらみ、髪と髭ひげが霜のように白い。一目で、漁師ということがわかる。長年、オホーツクの風雪にさらされ、なめし革のような肌になっていた。もう若いとはいえないのに肩の筋肉が岩のように盛りあがっている。風格があった。

——トガシだ……

霊太郎は、必要があつて、船に乗るまえに、この人物のことを調べておいた。トガシ——富樫、だろうか——。この吐裸羅島を基地にして漁をしている漁師集団の長おきだと聞いた。

「カシラ、オサムさ捕まえたけんど」男の一人がそう声をかけた。「どうすべえかね。一発、一二発、ぶったたいて、錠かけて、そこらの小屋サ放り込んでおくかね」

トガシはじろりと男に視線を走らせ、いんや、と首を振り、

「オサムのごとはあどだ。いまはそれより大事な話があるで——」そういうと、その視線をオサム、それから霊太郎に移して、「もう一人の、そのオドゴは何者だ、なじよして、こいさ連れてきた？」

「それが行きがかりどいうか——」

男は説明に困ったようだ。彼自身、どうして霊太郎をオサムと一緒に引っ張ってきたのか、そのことがよくわからずにいる。成り行きとしかいえないことだからだ。

「どうも」

靈太郎はにこにここと挨拶あいさつをする。どこまでも屈託がない。

「まあ、ええわ。せねばならねー話ば先にすべー」トガシはいきなり声を張りあげる。「みなも知つてのどおり、吐裸羅の海には、あの迂遠うんかむ咬がおる」

「……」

男たちのあいだに声にならないどよめきが走つた。明らかに、ウエンカムの名が彼らに動揺をもたらしたようだ——オホーツクで漁をする者でウエンカムの名を知らない者はいない。

「ウエンカムはオホーツクの悪霊、アザラシの王という。千頭の群れサしたがえ、三百もの雌サ養つてサいるそうな。いまも何十頭もの若い雌サ、繁殖場にひぎづれで、出産を待つでいるとのことだ。なにせ、身の丈じつに十尺（三メートル）あまり、重さは優サ百貫（三百七十五キロ）を超えらるどいう、話半分サしても、途方もねー化け物だべや。おらの祖父じいの、そのまだ祖父の代がら、こ



の島サ君臨しておる。よわい百歳、いんや、もつどがもしんねーべ。なにしろ何百年も生きている、どいう話さえあるほどだでな。歳としを重ね、その皮は鉄のように硬さを増し、灰色サ苔こけむし、ふしぎな妖力ようりよくは持つようになった。人サもかなわん知恵を持ち、人の心のうちサ巧みに読み、未来さきのごどサ読み取る、どいう」

トガシは訛りが強いし、その方言にも聞きとれない言葉が多い。霊太郎は頭のなかでそれを自動的に変換して聞き取るように努めた。

話の中身は荒唐無稽むげいに聞こえるが、まったくのデタラメというわけでもない。ウエンカムという大アザラシの名は、このあたりの漁師たちの間にひろく行きわたっている。霊太郎も噂うわさを聞いた。迂遠うげんは当て字だ。ウエンはアイヌの言葉で「悪」をあらわし、カムもまたアイヌの「神」カムイを短縮した語なのだという。ふん、つまり「悪の神」だ。

どうして悪神と呼ばれているかというところ——アザラシ漁に出る船に、その巨体をぶつけ、どうか

すると沈没までさせてしまうからだ。そのために死んだ人間も五人や十人ではないという。なに、いずれも人間のほうから向かってきたからのことで、ウエンカムから先に襲撃した例は皆無なのだが、そこまで人は考えがおよばない。ただもうウエンカムの恐ろしさばかりが強調されることになる。

なにしろ百歳をこえる寿命だというから、おのずと犠牲者の数も増えることになるわけなのだろう。これまでも何人が捕殺をこころみた者がいるが、ウエンカムはじつに狡猾こうかつで、そうした捕殺者たちの手を巧妙にすり抜けてきた……そのためになおさらウエンカムの名は伝説化され、ほとんどオホーツクの悪霊のように囁かれるまでになった。

霊太郎はアメリカの『白鯨』という本を読んだことがある。ウエンカムを、その小説に出てくるモービー・ディックという巨鯨になぞらえて捉えとらている……

「ウエンカムは獯猛とうもうで、ずるがしこいうえ、まか

ふしぎの妖力を持っておるべな。そんなら話、信じるわけではねーが、頭から疑うごどもできねーし。どっちさしろ、さわらぬ神サたたりなし……これまでわしらもウエンカムのごどは見で見ぬふりをしてきた。だども、なかなか、そういうわけさいかんようになってきた。函館はこだてのソ連領事館から、吐裸羅島のアザラシがあまりサ数が増えすぎて、魚場を荒らしてどにもなんねー、これを何どがしろ、という抗議が、函館の漁協にあったげの。アザラシの群れを何どがしろ、というのはつまり、ウエンカムを何どがしろ、というごどだべー

一昨年（昭和十二年）に締結された日独伊防共協定は、この年に改訂された日ソ漁業条約の改訂交渉にも影響をおよぼし、以来、両国のあいだにはギクシヤクとした空気が流れていた。函館のソ連領事館では、国旗と国章を撤去し、東京に引きあげるべし、という強行説さえ出ているらしい。そんなことになれば、査証を発行してもらい、ソ連領海で漁をしている各漁師団は、円滑に仕事がちゆかなくなってしまう。

もちろん、ウエンカムが大規模なアザラシの群れをひきいて、オホーツク海を跳梁跋扈ちようりようばつこしているのは、なにも日本漁団に責任があることではないが――

これはソ連の日本に対する一種のいやがらせであるだろう。そうとわかつていて、しかしソ連領海で漁をしている各日本漁団としては、それを無視するわけにはいかなかった。ソ連領事館のご機嫌を損なわないようにするのは、彼らのいわば生活防衛手段でもあったからである。どんな無理難題も飲み込まなければならぬ。それでも――

「……」

男たちが緊張せざるをえないのは、それだけウエンカムが恐れられている、ということだろう。

「わしら、ソ連の領海サ入って、漁をさせてもらうサに、領事館がら査証をもらわねばどうサもなんねー。領事館のいうごとサ逆らえねーし。ただでさえ函館の漁協がら、ウエンカムを何どがしろ、どいう矢の催促だ。ウエンカムを捕殺しさえすれば、群れは散りぢり、あどは一頭一頭を捕獲する

なり、捕殺するなり、どうどでもなるサに。ただ、ウエンカムはあんな化け物だで、たやすく捕殺するごとはできねー。命がけの漁サなるべーし。それでおらは考えだ。ウエンカムを捕殺した者サ、わが娘のカグヤをぐれてやってはどうか——」

「カ、カグヤ様を、か」誰かが悲鳴のような声をあげた。

「おうし。みなも知つてのどおり、カグヤは巫女のふしぎな力を持っておる。漁群ば見づげ当て、豊漁サ得るのに、ごどのほか力ば發揮する。カグヤをめどつた男は、その力サ得る道理だで——亭主サ、ウエンカムばしどめるほどの胆力があつて、女房サ巫女の力があえば、この世サさ、なんも怖いものはねーべき。わしらの漁団、ますます盛えらごどさ。それだから、その者サ、わしにかわつて一族のおさになつてもらうべき。いまのどこ、二人がそれに立候補している。一人は扨捉えとろふ漁団の漁場監督をしているカワグチで、もう一人は函館の日ソ漁業協会の書記ばなさつておいでの五十嵐いがらしさんで——」

トガシは片手をサツと岩場の下のほうに振り下ろした。それに符合をあわせるように、強い北風が海から吹き寄せてきて、石油缶から火の粉が舞いあがった。それが風に散り、煙が薄らいだとき、その後ろから二人の男の姿が浮かびあがった。

一人は、ラッコの襟をつけた革上着の四十男だった。肥<sup>かど</sup>っている。これが漁場監督のカワグチという男にちがいない。腰ベルトに大きな手<sup>て</sup>鉤<sup>かぎ</sup>をぶち込んでいる——その後ろには荒くれ男たちを何人か引きつれていた。いずれもナタか、手鉤を腰に下げていた。

もう一人は背広に、二重回しの外<sup>がい</sup>套<sup>とう</sup>、山高帽。細い口ひげ、瘦<sup>や</sup>せ身の、見るからに聡明そうな三十男だ。細巻きのタバコをくゆらしている——これが日ソ漁業協会・書記の五十嵐という男なのか。男たちの視線を集めて、左肩の獵銃を手に持ちかえた。

カワグチは扨<sup>て</sup>捉<sup>と</sup>の漁団を率いる漁場監督というから、アザラシ漁にも慣れてのことだろう。それに手下も多そうだ。

五十嵐は、漁師でこそないが、北海道の猟友会では名士とあっていい人物だ。クマ猟にかけてはなかなかの腕であるらしい……そんなことを知っているのは、そもそも霊太郎が吐裸羅島に渡ってきたのは、この五十嵐を追ってきたからなのだった。五十嵐については、いろんなことを知っている。

「悪<sup>わ</sup>りが、ウエンカムはおらが仕留<sup>しど</sup>めるだべな。それで、カグヤにはおらのよめサなってもらう。トガシのいうとおりだべ。おらの漁集団と、トガシの漁集団とが一緒になれば、オホーツクの海はもうわしらのものだ。ほかに怖いものはねー。なんぼ猟銃のうでサ覚えがあるか知らんが」カワグチは当てこするように五十嵐の顔を見て、「漁協の旦那衆にウエンカムばしどめるのは、はっ、ま<sup>ん</sup>ずムリだんべさ」

カワグチは豪快に笑った——すこし豪快すぎるようにも霊太郎は感じた——。そして、ふところから酒の瓶を取り出すと、栓を抜き、それをグビグビとラツパ呑<sup>の</sup>みにした。その顔が急に青ざめた

……

「そうかもしれない。ムリかもしれない。ただ、ぼくのほうにも、何が何でもウエンカムをしとめなければならぬ事情があつてね。ムリは承知で、それでもウエンカムに挑戦しなければならぬ理由があるのさ」

五十嵐はカワグチの挑発を受け流すようにそういった。穏やかではあるが、どこか冷笑的なようにも感じられる口調だ。

「どんな理由ですか」

おどろいたことに、そこでそう口出したのは霊太郎だ。そんなふうにくるぐる巻きに縛られても、この若者はそれを何の苦痛にも感じていないようだ。鈍感なのか、それとも剛胆なのだろうか。が、風変わりなのは五十嵐という男も同じのようで、縛られている霊太郎に声をかけられたのを、あたかも何のふしぎもないことのように平然と受けとめると、

「これだよ」そう言って、ふところから一枚の花札を取り出したのだ。「こいつでしくじった。つ



い賭場とばで熱くなりすぎた。漁協のカネに手をつけた。カネを返さなければ懲役だし、カネを返したところでクビになるのはまぬがれない。一発逆転、カネを返して、次の仕事にありつくには、ウエンカムをしとめるほかにないのさ」

「なるほど」霊太郎は感心したようにうなずいて、「あなたはギャンブラーというわけなんですね」

正直といえ、あまりに正直すぎる五十嵐の言葉に、さすがに男たちはたがいに顔を見あわせた。ざわついた。

「いいんかい、オサ」男たちの一人がそう訊いた。「いい」トガシはキッパリいった。「五十嵐さんの狩猟のうではたしかだ。ウエンカムばしどめるのに、何より大切なのはそのごどだべ。それに、いるかいねーかもわからねー魚群ば求めで、海サ出るのが、そもそも博打ばくちでねーか。博打打ちの五十嵐さんに、オサになってもろうて、何の不都合があるもんか」

——この二人の男がウエンカムを捕殺するのを競うわけか。それで首尾よくウエンカムをしとめ

たほうが、トガシの娘のカグヤをめとることになる……

霊太郎は、しめ縄でびっしりかためられた小屋の、あの巫女姿の美少女のことを思い出していた。おそらく、あの少女がカグヤなのだろう。トガシは、カグヤは巫女の力を持っているといった。魚群を見つけ当て、豊漁を期することができたのだ、と。

小屋の空気取りの穴から、つかのまカグヤの姿を盗み見ただけにすぎないが、それでもあの少女からは、なにか尋常ではない霊気のようなものが感じとれた。たしかに、あの少女なら、神意を人々に授ける能力が備わっていたとしてもふしぎはない……

「あ、おめえ——」

そのとき、ふいに男たちの一人が素っ頓狂とんきやうな声をあげた。ほかの男たちからも驚声おどろこが飛んだ。

「オサム、いづのまに——」

そう、いつのまにかオサムは縄をほどいていたのだ。そればかりか、その右手に一本の銚もりを持つ

ているのだった。おどろき騒ぐ男たちには目もく  
れず、若々しい仁王のように、その場にすつくと  
立ちはだかっている。その笑う齒がまばゆいほど  
に白い。

「騒がねで、みんな——」

そのオサムの後ろから少女の声が聞こえてきた。  
いまはもう巫女の姿はしていないが、それはあの  
カグヤなのだった。男たちの視線を一身に集めな  
がら、すこしも怯ひるまず、りんとして、美しい。

「カグヤ、オサムの縄ばほどいたのはおめえーが  
したごどか」

トガシが低い声で訊いた。男親は総じて娘に弱  
い。娘を見る目が、咎めるといふより、どこかと  
まどうようだった。その声も、この剛直そうな男  
に似つかわしくなく、妙に弱々しい。

「んだ、父ちゃ、オサムはなんも悪りいごどはし  
てないよ。わだしサ会いに来ただけでねーか。そ  
れだけのごどで縄でゆわぐのは横暴だべ。ひどい  
サ」

「巫女のおめーが何ばいうか。わしらにはわしら

の掟おきてがあるら。オサムはその掟ば破ったから追放されたんでねーか。それば勝手コサ戻ってきたんではしめしがつかねー。こべなふうに縛るしかねーし」

「掟？ 何の掟だべ？」カグヤが明るい声で笑う。「わだしはこれまで、若いオドゴが若いおなごサ会いにきてはなんねー、どいう掟など一度も聞いたごどないよ」

「おめえー、そしたらへ理屈サいって——」トガシは閉口したようだ。「それより、神事ばつかさどる巫女が、こんなふうに勝手こさカムイトマリば離れてもいいのか」

アイヌ語でカムイは神、トマリは港……つまりカムイトマリは「神が寄る場所」、あの社やしろのことだろう、と霊太郎はそう解釈する……

「なんも、わだしは勝手こさカムイトマリ離れたわけでねーす。ちゃんと神様のお許しば得ていら。それに、わたしがごでこうしてみんなサ話しているごどは、神意サ添うごどでもあるし」

「神意？ 何ばまた勝手なごどばぬがすか。何の

神意か」

「お父ちゃ、神様はこうお告げばなされたし——  
オサムにも、ウエンカムばしどめる権利ば与えて  
やんねーば、なんぼも不公平でねーか、と」

「な、何ぬかす。何で神様がそしたらお告げばす  
るものか。嘘ばつくでねー。それに、オサムのよ  
うなわらしにウエンカムばしどめるなどというご  
どができようはずがあんめえよ」

「何の、お父ちゃ、わだしは嘘はつかねーもん。  
こいはまぎれもねしサ神意だべ。神意である証拠  
に——」

その証拠に——

目のなかに泡がはじけた。海がうねる。ぐんぐ  
ん浮上していった。光がはぜた。頭上で氷が砕け  
た……

「おお！」

男たちの驚声が宙に交叉こうさした。彼らの視界に光  
がひらめいた。その光は海面から宙に大量の水し  
ぶきを曳ひいて走った。黒々と巨大な影がおどった。  
それは——

「ウエンカム！」

海面に小さな水桶みずおけが浮かんでいた。それを鼻先で突きあげた。跳びながら、身をくねらせる。水桶が鞠まりのように放物線を描いて横に飛んだ。氷床に落ちてバラバラになった。男たちはおどろきの声をあげて飛びすさった。明らかに人間を挑発していた。そうでなければ嘲弄ちやうしやうしていた。

海獣の悪霊、アザラシの王は高々と跳躍し、空をつんざく咆吼ほうこうを放った。それが霧笛のようにとどろいた。

それはほんの一瞬のことだった。その電光の一瞬に——三人の男が動いたのだ。

五十嵐は猟銃を撃った。

カワグチは手鉤を投げた。

そしてオサムは銆かを投じた。

が、あまりにウエンカムの動きは速すぎた。手鉤も、銃弾も、銆も、ウエンカムに届かなかった。男たちの目のなかに、閃光せんこうのような残像を残し、ウエンカムは海に戻った。まるで爆雷さくらいが炸裂したように高々と水柱が立った。そのまま消えた。あ

とにはうねる海面が残されたが、それもやがておさまった。

「……」

男たちのあいだに放心したような空気が流れた。誰もがただ呆然ぼうぜんと立ちすくんでいた。さすがにオサのトガシだけは無様に動じることはなかったが……

ただカワグチ、五十嵐、オサムだけが生気をみなぎらせていた。手鉤を投げ、銃を撃ち、銛を投じた彼ら三人の判断力、反射神経には見るべきものがあつた。たしかに並みの男たちではない。

カワグチはいっそう青白い顔になり、また酒を飲んだ。五十嵐は片頬かたほおに皮肉な笑いを刻んでいた。オサムは、どうして自分の銛が届かなかつたのか考えているのだろう、その太い眉まゆをひそめていた。

思いもかけないウエンカムの出現に、毒気を抜かれ、すっかり、なりをひそめている男たちのなかにあって、

「お父ちゃん、こいでわがっただべ。ウエンカムばしどめるのに、オサムば選んだのは、神意なんだ

って——オサムのうちでは、失礼ながら、ほかのお二人サ、ひけはどらねーべ。互角だ」

「互角とはいえないな」五十嵐があいかわらず、どこか皮肉めいた口調でいう。「そのオサムという若者には、お嬢さん、あなたが知っている。そのかぎりにおいて、われわれは不利だ」

「何、ウエンカムさえ捕れば、いいだけのごとだ。んだすれば、カグヤはおらの嫁サになるし。それまで誰のごと好きだろが、そしたらごとは何の関係もね話だ——トガシ、その約束サに嘘いつわりはねーだべな」カワグチが粗野な口調でそういう。「誰が嘘などつぐものか」トガシは吐き出すようにいう。「そのごとサまで、娘がそむぐのば許すほど、わしはまだ老いぼれてはおらぬわい」

「そうですか」五十嵐は皮肉に笑って、カグヤを見ると、「お嬢さんはそれでいいのかな——ほくか、カワグチさんが、ウエンカムをしとめたら、オサムくんのはきっぱりあきらめてくれるのですか」とこれも皮肉まじりの口調で訊いた。

「何ばバカなごとを——掟サそむくづもりサこれ



っぽっちもねーし。そのごとサ心配しねでくれ」  
が、それに対するカグヤの口調はきっぱりとした  
ものだった。「わだしはただ、ウエンカムばしど  
めるのに、オサムはそのなかに加えてぐれば、  
それだけで文句はねー。それ以上のごどは何も望  
まねー」

カグヤのその毅然とした物腰に、さすがに氣押  
されたのか、それ以上は五十嵐も、カワグチも何  
もおうとしなかった。

そのとき口をはさんだのは——こともあろうに  
部外者の霊太郎なのだった。

「ぼくもウエンカムをしとめる一人に加えてもら  
えませんか」

その、あまりにノンシヤラン、いけしゃあしゃ  
あとした口調に、男たちは一斉に霊太郎を見て  
——そして一様におどろきの声をあげたのだった。

なぜなら霊太郎がいつのまにか縄をほどいてい  
たからだ。あれほど堅くいましめたはずなのに、  
どうやって縄をほどくことができたのか。まるで  
縄抜けの大奇術でもあるかのようにではないか。

「ねえ、お願いしますよ。ほくもその一人に選んでください」

そう臆面おくめんもなくいう霊太郎に、しかしオサのトガシも、ほかの男たちも、ただあっけにとられるばかりで、何もいうことができずにいるのだった。